

春日部福音自由教会 2021年3月14日 11:00 中央会堂礼拝（同時配信）

聖書 新約聖書 マルコ 10章 35節～45節

説教 「キリストのように生きよう」 小野信一牧師

おはようございます。昨夜はよく眠れましたでしょうか？ なんだか風が強くて、私はあまりよく眠れなかったような感じで朝を迎えました。

今日もまたこの中央会堂に集まり共に礼拝をささげています。ともに賛美をささげ、祈り、また今聖書が朗読されました。このみことばに、耳を傾けております。この場所に、今顔が見えるところにいらっしゃる方たちも、また家に留まって家から YouTube を通して、同時配信によって一緒に礼拝をしている方たちと共に、今日ここで私たちは礼拝をささげております。今朗読されたみことばに耳を傾けて参りたいと思います。

I 一年を振り返って

受難週まで2週間、復活祭まで3週間となりました。今年も、昨年に続いていつもしている模擬店とか、腹話術とか、子どもの抽選会などを行うことができない復活祭になろうとしています。それでもキリストの十字架と復活という素晴らしいニュースと一緒に受け止め、味わう時としたいと願っています。

またもう3月半ばになり2020年度も終わろうとしています。大変な一年でした。皆さんにとっても、それぞれの生活の場でそれぞれのご家族の中、また健康のことや仕事のこと、いろんなこと、大変なことが多かったであろうと思います。今日は午後には合同信徒会をします。1年ぶり、それ以上になります。去年の3月1日に、この中央会堂にみんなで集まって合同信徒会をする予定でしたが、中止にしました。その日の聖餐式を急遽中止にしました。それから1年。色々と予定の変更があり、この日曜日の礼拝自体を集まって行うことを止める、そういう時もありました。そんな中4月12日、去年の復活祭の日から礼拝の同時配信、YouTubeの同時配信が始まりましたね。今は三会堂で集まって礼拝をしていますけれども、でも今日もまた中央会堂、この場所に集まるのは最大50名として、いつもよりも、前よりも、椅子の間隔を空けて2人、3人ずつで間を空けて座っています。50人超えたら、下で視聴していただくというような形をとっています。

皆さんこの一年振り返ってどうだったでしょうか？ ちょっと二つのことをお尋ねしたいと思います。この一年振り返って大変だった事はどんな事だったでしょうか？ たくさんあると思います。けれどももしですね、お互いの中で一年振り返ってこんなことがありましたって、お互いに分かち合うとしたら、もし一つあげるとしたら、一年振り返って大変だった事はどんな事だったでしょうか？ またもう一つ、この一年振り返って感謝だったことはどんなことだったでしょうか？ 大変だったこと、それを乗り越えてきたこと、感謝だったこと、それらを振り返りつつ、数えつつ、またここから前に進んでいきたいと思っています。

II 何を求めているのか、分かっているか

さて今日のみことばはマルコの福音書10章35節から45節です。

まず前半の35節から41節のところですが、ここに、分かっている弟子たちが出てきます。ここの部分だけでもですね、色々とは是非お話ししたいと思ったことがたくさんあったのですけれども、ちょっと前半部分は短くしてお話しさせていただきたいと思います。

イエス様が都エルサレムへの最後の旅の途上にあります。エルサレムはイエス様にとって死に場所です。十字架に架けられて死刑になって死ぬことになる場所です。そのエルサレムに、いよいよ近づいているのが今日開かれた聖書のこの場面です。距離も近づいてきています。時が迫っています。このすぐあと 46 節のところで一行がエリコに着いたと書いてあり、エルサレムに近づいています。そして 11 章、一行がエルサレムに近づきベタニアに来た、それからロバに乗ってエルサレムに入る場面につながっていきます。

時が迫っているそのときのことで、ちょっと場違いな願いを申し出ると言いますか、周りから見たら「この人たち分かってないんじゃないの？」って思われるようなことをお願いする人たちが、ここに登場してきます。35 節にヤコブとヨハネという名前があります。2 人が言うんです、イエス様に。「先生お願いがあります」。イエス様は答えます。「何をしてほしいのですか」。このイエス様の質問、イエス様の問いかけに、とても似た問いかけがこの後の 51 節のところにも出てきます。「わたしに何をしてほしいのか」。この人は目の見えない人でした。そして彼は自分の願いを話します。「わたしに何をしてほしいとあなたは望むのか」。ヤコブとヨハネにイエス様は尋ね、目の見えない人にも尋ねました。この質問を私たちもですね、今日自分に問われていることとして聞いてみましょう。イエス様が尋ねておられます。「あなたはわたしに何をしてほしいのか」。もし一人一人がイエス様に尋ねられて、イエス様に答えるとするならば何と答えるでしょう。何と答えましょうか。「私の願いはこれです」「イエス様これをしていただきたいのです」。一人一人の願いは何でしょう。是非ちょっとそれぞれご自分でですね、考えてみていただきたいと思います。

2 人は、ヤコブとヨハネは、こう言いました。「先生あなたが栄光をお受けになるとき、右と左に私たちを座らせてください」。イエス様が受ける栄光が、この世での栄光であるとするならば、イエス様がこの世の王になるとするならば、右と左に座るということは、この世でとても高い位置に着くということになりますね。ヤコブとヨハネは右と左に座らせてくださいと願いました。しかしイエス様の受ける栄光はそういうものだったでしょうか。どうやら違ったようです。イエス様の受ける栄光とは十字架にあげられるという栄光の姿でした。高い地位に就く、高い王座に登るのではなくて、低いところに降りて行き、降りて行き、降りて行き、最後には十字架に上げられる、吊るし上げられるということでした。そうだとすればイエス様の右左につくということは、それは死ぬことです。イエス様と一緒に死ぬことです。自分を与えて誰かを生かすことです。けれど、ヤコブとヨハネはそれを願っていたかということ、そうじゃなかったかもしれません。実際にはイエス様が十字架についたとき、右と左と一緒に十字架に架けられた 2 人の男たちがいました。でもそれはヤコブとヨハネではなく、2 人の犯罪人でした。この後 2 人はどうなるか、ちょっとそれもですね、色々話したいことがありますけれども、そこはあまり詳しくは触れないことにしたいと思います。

ただイエス様は 2 人に言いました。「あなたがたは分かっていない」。38 節、「あなたがたは自分が何を求めているのか分かっていません。わたしの飲む杯を飲めるのか、わたしの受けるバプテスマを受けられるのか、あなたがたは分かっていない」と、イエス様は言われます。ここに分かっていない弟子がいます。自分が何を望んでいるのか、求めるのかさえ自分で分からないのです。この後の 41 節のところでは、12 弟子のうちの残りの 10 人が、2 人に対して腹を立てたと書いてあります。「自分たちだけが右と左につきたいなんて、一番いい場所につきたいなんて、何を言っているんだ。抜け駆けか。許せない。俺こそ相応しいのに」。なんと分かっていなくて、とにかく腹を立てたのです。この 10 人もまた分かっていないのです。2 人は 39 節で「できます」と言うんですよね。でも自分がどういうふうになっていくのか、「できます」と言いな

がら自分で分かっていないのです。2人も分かっていない。10人も分かっていない。そしてここにいる私たちもそうではないでしょうか。

私たちもまた自分のことが分からないでいる。自分が何をしているのか、自分が何を望んでいるのか分からないでいる。でもイエス様がそういう人のために祈ってくださいます。十字架上の祈りのことばがあります。ちょっとこれは聖書を開いて読みたいと思いますが、ルカの福音書の23章の34節のみことばです。ルカの福音書23章の34節お読みします。「そのとき、イエスはこう言われた。『父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです』彼らはイエスの衣を分けるために、くじを引いた」。十字架の場面です。イエス様を釘で打って、手と足を釘で打って、木に打ち付けて、木を立てて吊るし上げた人たちは、イエス様の着ていた服を脱がせて、誰がこれを自分のものにするのか、くじで決めていました。その前には頭を叩き、唾を吐きかけ、馬鹿にしました。周りには立って眺めている民衆、嘲笑っている議員たちがいます。そういう人たちを前にして、イエス様は、十字架の上で殺されていくその途上で祈ってくださいました。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは自分が何をしているのかが分かっていないのです」。イエス様は分かっていないヤコブとヨハネ、分かっていない10人の弟子、また分かっていない私たち皆のために、十字架上で祈ってくださるお方です。

ヤコブは12人の中で最初の殉教者として死にました。使徒の働き13章だったでしょうか、そこに書かれています。一方その兄弟ヨハネは、12弟子の中で最後まで生き残って、ヨハネの黙示録を書いた。そのように伝えられています。兄弟ですけども一方は短命、一方は長命でした。私たちもいつまでこの世で生きるのかは自分で決められません。分かりません。でもヤコブとヨハネ、2人はふたりなりに、それぞれにイエス様の苦しみを身に負いました。私たちも短命か長命かは自分で決められないし、自分で分かりません。でもそれぞれに自分の務めを果たしていきましょう。

Ⅲ 仕える者になりなさい

さて後半42節からのところに移っていきたいと思います。マルコの福音書に戻って、42節からのところです。2人が願いを言って10人が怒り始めたときに、イエス様は12人を呼び寄せました。「近くに来なさい」。12人にまた親しく語りかけたのです。そして「あなたがたの間では、先に立つために、リードするためには、皆のしもべになれ」と言われました。42節には異邦人たちのルールが書いてあります。そして、43、44節にある主に従う者たちのルール、原則は、異邦人たちのルールとは異なっています。「異邦人の支配者」と書いてありますが、異邦人というのは外国人という意味ですけれども、イエス様は、弟子たちは、いわゆるユダヤ人ですので、別の民族の人たちということでしょう。ローマ人もいたでしょう。周辺の人々もいたでしょう。そしてもう一つの意味は、我々同民族はこの聖書、旧約聖書を信じている、聖書の神を信じているけれども、異邦人というのはその神様を信じてない人たちのこと、と言っても良いだろうと思います。その外国人たちの社会では、「上に立つ人支配者、指導者と呼ばれる人たちは人々の上に立っている」。イエス様はそう言われました。そして、「しかし、あなたがたの間では違う」と言われたのです。「あなたがたの間」ということばが、43節に2回出てきますね。「あなたがたの間ではそうであってはなりません」。同じではないと。「あなたがたの間で偉くなりたいたいと思う人は、皆に仕える人になりなさい」。正反対、反対なんだと言われてます。もう1回44節にも出てきます。「あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしも

べになりなさい」。先に立ってリードする、リーダーとなろうとする人は、皆のしもべになれというのです。異邦人、この世の人たちの習慣や、ルールや、振る舞い方と、イエス様に従う人たちの間でのルール、習慣、振る舞い方は全く違うのです。反対なのです。偉大な人、偉い人、大きい人は人々の下に立つ。そして、「皆に仕える者になれ」、「先に立つ人は皆のしもべになれ」、そうイエス様は言うのです。

45 節、今日のみことばの朗読箇所では最後の所になりますけれども、45 節に主イエス様が来られた目的、そして生き方の原則が示されています。イエスさまは言いました。「人の子は（これはイエス様がご自分のことを「人の子」と呼んでいるのです）仕えられるためではなく、仕えるために来た」と言われます。仕えるということば、英語で言えばサーブ。サーブって言いますよね。日本でも日本語でもサービスっていうふうにあります。この言葉は、いろんな意味で使われます。サーブする。例えばスポーツでもテニスとかバレーボールでサーブする。サービスっていう言葉を使いますよね。そして、「礼拝する」というのもサービスです。「奉仕する」もサービスですね。あるいは給仕する、食卓で仕えて、食事を整えて食事を出してもてなす、仕える。それもサーブですよね。もちろんサーブは「仕える」と訳すことができますし、このことばは執事として仕える、執事というのは「仕える人」、「仕える者」ということばです。「人の子は仕えるために来た」。ギリシャ語では「ディアコネオー」って言いますが、執事っていうのは「ディアコノス」「仕える人」という意味であります。あるいはそれは「奉仕」、これも「ディアコノス」であります。ですから奉仕のために仕える、などの意味がこの言葉には含まれているわけです。イエス様は仕えられるために来たのではない、「わたしは仕えるために来たんだ」と言われました。

皆さんにちょっとまた質問してみたいと思いますが、皆さんは、あなたは何のために主イエスのもとに来たのでしょうか？ また何のために教会に来るのでしょうか？ 仕えられるためでしょうか？ それとも仕えるためでしょうか？ 仕えてもらうために教会に来るってということも、実際にあると思います。誰かがそこで優しく温かく迎えてくれる、助けてくれるってことがありますよね。そしてもちろん神ご自身が仕えてくださいます。私たち一人一人に、キリストはしもべとなって足を洗って、足ばかりか、罪を洗って、人間の罪を洗って徹底して仕えてくださいます。しかし、私たち一人一人の罪人は、仕えられるためだけに教会に来るのではありません、礼拝に来るのではありません。私たち一人一人の罪人は、赦された罪人となれるのだと信じています。キリストを信じた人は、生まれながら皆罪人なのですが、赦された罪人として生きていくことができるのだと信じています。

そういう私たちは、仕えられるためだけに礼拝に来るのではありません。自分に仕えてくださったキリストに仕え、キリストに礼拝をささげる、サービスをささげるために教会に来るのです。教会に行ったら誰かが仕えてくれるというふうに考えますと、するとですね、時に「仕えてくれない」と思ったり、「仕え方が足りない」と考えたりしてしまうことがあるかもしれません。あとこれは時々聞くのですが、この教会でというんじやなくて、色んな所で聞くように思うのですが、「この教会には愛がない」と思ったり、言ったりしてしまうことがあります。でも、もしあなたが教会の一員、キリストのからだの一部であるならば、この教会は、あなたの教会は、あなた次第で、愛のない教会にもなるし、愛のある教会にもなります。教会と一言で言ってもですね、今これは春日部福音自由教会という名前の教会のことを言っていますけれども、各会堂がありまして、分かれて礼拝をしているわけですね。今日も 11 時から中央と丘の上、9 時から庄和会堂で、三つの礼拝があります。三つの場所での礼拝。それから世代もあります。中高生の礼拝もあるし、小学生には小学生のリト

ル・シーブがあります。世代が分かれています。また様々な働きがあります。教会の働きの中に枝分かれがあつて、ELCの英会話もあれば、幼稚園もあればボーイスカウトや音楽教室や茶道や、色々な働きに分かれています。そしてこの一年、礼拝堂にこうやって集まって顔が見えるところにいる人と、カメラの向こう YouTubeを通して、これを見て聞いている、家で礼拝をしているオンラインでの礼拝者というふうに、1年前よりも、もっと分かれてきているというふうに思います。お互いの顔が見えない中、体温が感じられない中、触れないように、近づかないように、1年間過ごしてきましたので、もしかしたらこの中にですね、教会に繋がっている、顔が見えていないところにいる方たちの中に“愛が足りないな”って、感じてる人がいるかもしれません。十分届いていないかもしれません。特に顔が見えないところにいる方たちに、一人一人に、この教会から十分愛が届いていないかもしれない。そうだったら申し訳ないなと思っています。

去年の4月12日の復活祭の次の4月19日の日曜日から「同時配信礼拝のみにします」ということで、「皆さん来ないでください」として、「家に留まって一緒に礼拝しましょう」、「できれば同時に YouTube で礼拝しましょう」というふうになりました。その最初の礼拝の時に「必ず届けます」と、「皆さんとともに礼拝する方法を今 YouTube で、たまたま YouTube 見られない人のためにはほかの方法で、CD とか音声とか、あるいは紙で、読む説教として文字にしたものによって、必ず届けます」というふうにお話ししました。お約束をしました。そして一週一週、「届いてるかな?」、「YouTube 見れてるかな?」、「誰が見れているかいな」。途中で接続が切れちゃったり、音が聞こえないとか、そういうこともありました。でもそれを改善しながら毎週毎週行ってきた。そうやって、いろんな形の奉仕があつて、なんとか一緒に礼拝するっていうことは、この一年できてきたかなと思います。皆さんに届いたでしょうか? ただ、なんとか礼拝ができたとしても、交わりの面ではですね、とても少なくなってしまうということを感じています。皆さんに届いているだろうか、届いていなければ申し訳ないな、そう思ったり恐れたりして一年を過ごしてきました。一方では、この教会の中でのですね、いろんな部分部分ですね、場所が分かれたり世代が違ったりいろんな働きがある中で、それぞれの部分を見てですね、ここには愛が溢れてるなと感じたこともありました。自ら進んで、誰かを愛そうとして、できることを自分で見つけてして、自分を与えて、誰かを支えている人たちがいる。あるいは自分を与えて相手を支えているとも思わないで、自然にそういうものが流れ溢れ出ているように感じることもありました。「あなたは仕えられるために来たのか、それとも仕えるために来たのか」と、主イエス様に問われる思いがします。主イエスは言われます。「わたしも仕えられるためではなく、仕えるために来たのです。わたしがしたように、あなたがたの間でもそのようにしなさい。わたしも自分のいのちを与えるために来たのです」。

愛というのは何だろうと言ったら、一言で言えば「自分のいのちを与える」という言い方をすることができるでしょう。様々な仕方で、夫婦の間で、親から子に、ともに仲間に、自分自身を与えていこうとする、それが愛であろうと思います。イエス様は言われます。「わたしも自分のいのちを与えるために来たのです。あなたがたの間ではそのようにしなさい」。皆さんの中に、自分は仕えられるか、仕えるかってことというんですね、皆さんの中に「自分は仕えられることが足りてないな」、もっと仕えてほしいな、仕えられたいなと思う人はいるでしょうか。一方、「仕えることが自分は足りないな」と思う人はいるでしょうか。両方の人がいるのかもしれませんが、是非、誰か必要を持つてる人がいるならば、この教会の中で、交わりの中で、お互いに自ら相手に仕える者にならせていただきます。相手が望んでいることを、自分もしてもらいたいと思うこ

とを、進んで誰かのためにしましょう。お互いの成長と建徳、建て上げるために（建徳、徳を建てるという字ですけれども）お互いを建て上げて 成長できることにつながることを、進んでしていきましょう。

もう一度今 45 節を見てですね、イエス様がどのように言われたか、イエス様は何のために来たのかっていうことを確認したんですけれど、もう一度それを見たらうで、43、44 節に戻ってみましょう。「仕える者になれ、しもべとなれ」と言われました。それは正に自分のいのちを与えるということと同じでしょう。それが私たちキリストの道を歩もうと願う者たちの、生き方の原則です。

主イエスが戦う時に、私たちも戦います。イエス様が黙るとき、私たちも黙り、イエス様が祈るとき、祈り、イエス様が捕らえられるときに、私たちもともに捕らえられ、渡されるとき、渡され、イエス様が戦わないときには、私たちも戦わず、イエス様が傷つくとき、傷つき、イエス様が馬鹿にされるとき、私たちもバカにされ、イエス様が死ぬとき、私たちも死にます。

それが私たちに示されている原則です。これは簡単なことではないですよ。大変なことです。どうやったらそれができるのか、どういう場面でどうしたらよいか葛藤しつつ、でもこの生き方を追い求めて行きたいと思います。

IV 三つの相手と向き合う

自分と向き合って、「自分はしてもらふことばかり求めてたな」とか、「やりたいと思いながら、やりますと言いながら、できてなかったな」とか、自分と向き合い、自己中心と戦い、自分を甘やかしたい思いと戦って、そして、これは、私は握りしめていたいと思うものがあるときに、握りしめないで手を開いて、開いた手で神様にお委ねしていく。

今日は原則を示していただいたと思います。これが私たちの生きる道です。どう生きたらいいでしょう。一人一人の人生の道でこの生き方を追求していきましょう。そして何が難しいか、何に葛藤するか、何ができてできないか、向き合っていきたい。

三つの相手と向き合うことが必要だと思うんですね。一つは、自分と向き合うということです。自分自身と向き合うことですね。二つ目は、神様と向き合うことですね。神様に話を打ち明け、そして耳を傾けるってことです。ヤコブとヨハネは分かってないなっていう願い、お願いでしたけれども、でも、イエス様の前で率直でした。イエス様に「私たちが願うのは、こうなんです」って言ったのです。分かっていなかったんですけどでも、彼らはイエス様の道を後で歩むようになっていきました。私たちもできるだけ率直に、「神様、私の願いはこうです。神様、私こういうことを願ってます。これが不満です、これが心配です。」と神さまに打ち明けましょう。心を打ち明けましょう。そして打ち明けるだけ、話すだけ、願うだけではなくて、打ち明けたら今度は耳を傾けましょう。それに対してイエス様が何と言われるか、神様がなんと言われるか、聖書を開きつつ、耳を傾けていきましょう。二つ目は神様と向き合うことですね。

三つ目は、お互いと向き合うということです。こうやってイエス様のもとに引き寄せられ、集められている私たちが、お互いと向き合って、互いと語り合ひましょう。この一年あまり顔を合わせて近い距離で話すことが少なかったと思いますけれども、気をつけながら、できる形でしましょう。お互いが心を開いて自分のことを、できるならば正直に率直に話し、また相手のことを、心を低くして聞き合ひましょう。その交わりはイエス様に引き寄せられた人たちの交わりです。それが教会です。互いがお互いのありのままを出しても、「私、

実はこんなこと願ってるんだ、こんなことあったんだ」と言っても、それでも受け入れ合うことができる。支え合い仕え合い、足を洗い合い、汚いダメなところを洗い合っ、そして罪を覆う（覆うっていうのは隠蔽って意味ではないと思いますが）、覆い合う。そしてありのままの自分の心の底の方から希望が湧きだしてくるようになる。それがイエス様と繋がっている、そしてお互いと繋がっているという、そういう交わりです。私たちはお互いに不完全な人間ですが、ヤコブとヨハネも10人も本当に不完全でしたね。私たちもそうです。でもどんなに不完全な人間も切り捨てられない。イエス様は切り捨てない。ヤコブとヨハネにお前たちはダメだって言わないんです。そう信じて、私たちも互いを切り捨てることをしません。

V キリストのように生きよう

最後にキリストを見つめキリストのように行動してみましょう。イエス様を見つめ続けましょう。できるだけ近くにいきましょう。あと3週間で復活祭。残りの受難節の半分の3週間、地上のイエス様がどんなふうに歩んだか、聖書を繙き、見続けましょう。そしてもう一つは、キリストから来る光で自分を見ましょう。そしてその同じ光で自分の隣の人たちを見ましょう。具体的な場面で、キリストのように行動するとはどういうことか、考えやってみましょう。イエス様は「わたしは仕えられるためではなく、仕えるために来た。自分のいのちを与えるために来た」と言われました。「だから、あなたがたもそのようにしなさい」と言われました。イエス様の地上の最後の姿を、あと3週間見つめていきましょう。

イエス様が、言われたことを実行したかどうか見ていきましょう。そして私たちも言ったこと、大切だと思っ口にしたこと、実行できているかどうか確かめていきたいと思っます。私たちが「これだよこれが大事なんだよ」と言っていることを、言っている自分ができているかどうか、それをチェックしなければいけないなというふうに思っます。思っ出す一つの出来事があるんですけども、私が卒業した中学高校の10年ぐらい前の話なんですけど、当時の校長先生がいました。一度お話しする機会があったんですけど、あの無教会の内村鑑三の弟子であった方のお孫さんでもあり、無教会の人でしたけれども、若い頃には洗礼を受けたということを伺いました。ある時その学校でするね、特別授業があっ、卒業生が特別授業をするっていうので、私の水泳部の同級生が一つの授業をしました。それは高校生だと思っますけど生徒たちが自分たちでビデオを作るっていう授業だったんでするね。テーマは「この学校といえば」みたいな、「この学校はといえば」みたいなのがテーマでした。そのテーマで写真を撮ったり、なにかインタビューしたり、声を録ったりして、それを組み合わせて動画を撮ったりして編集するっていうのを作ってもらっ。その指導を同級生がしたんでするね。最後にその発表があるっていうので、私も「見学に行きたいんだ」って言って、見学に行かせてもらいました。そして最後に彼が、同級生が編集したビデオを流したんでするね。最後に彼が当時の校長先生に職員室の横の廊下で、インタビューして、尋ねたんです。「この学校とは一言では何ですか」みたいなことを聞いたら、その校長先生がでするね、振り返って一言言うんです。「自由だよ、自由！」。って言って振り返って去っていくっていう場面で、そのビデオは終わりました。それを高校生たちと一緒に見てたんです。そしたら私の前に座ってた高校生が、ボソッと言いました。「自由だよ自由」っていうの聞いて、「言ってる本人が一番自由だよ」って言ったんでするね。その場面が忘れられないのです。確かにその自由という一言はその学校が大切にしている言葉だと思っます。大切にしていることだと思っまするね。先生たちが、校長先生が、いつもそれを伝えている。人間にとって「自由は大切だ」と、いろんな観点からそのことを教えたのでしょ。で、一言「自由だよ自由」

って言うてですね、「言うてる本人が一番自由じゃないよ」って言われたらどうでしょうか、ってことを思いました。でもそこにはですね、「言っている本人が一番自由だよ」って、ポロっと言ってしまう高校生がいたんですね。すごいな一って思いました。翻って、私はじゃあ、この教会の中高生たちに、いつも何を語り、何を伝え、何が大事だと言うてるだろうか。一言で言ったら、愛ですよ。『愛だよ愛』って中高生に言うてですね、「言っている本人が愛じゃないじゃん」って言われたら、駄目ですよ。まあ中高生がどう思ってるかよく分かりません。けれども、その場面を思い出すたびに、中高生にもまた教会の大人の皆さんにもですね、「何が大事？ 愛だよ愛」って言うて、「言うてる本人が一番愛だよ」って言われるようだったら凄いなって思いました。でもとてもそうなってはいないと思います。と皆さん思っているかもしれません、今。でも、なりたくなつて思ったし、ならなきゃなつて思いました。イエス様は、「わたしは仕えるために来た。いのちを与えるために来た」、それが愛だとするならば、そのように実際にしてくださった。私たちはその道を歩むなら、同じようにならなければならない。そうなりたと思います。目指す道は遠いです。でも「無理だ」って止めることはできません。目指すところを、目指すところに、進んで行きましょう。キリストが生きたとやうに生きる。キリストを見つめ続けて、キリストのように行動してみましよう。

お祈りをささげましよう。

天の父なる神様。今日この中央会堂で、またオンラインで、ともに礼拝をささげることができ感謝します。イエス様が、仕えるために来て、いのちを与えるために来たと言われました。そして実際にいのちを与えて十字架で死に、そしてよみがえられました。私たちはそこに込められた愛を信じます。そこにいのちがあること、赦しがあることを信じます。そこから新しいいのちが始まることを信じます。イエス様の光に照らされる者として、イエス様が歩まれたように、仕える者となり、しもべとなり、いのちを与える者として、この人生を生きて行くことができますように。人生が長いとしても短いとしても、残る人生がたくさんあっても少ししかなくても、一人一人が精一杯生きられますように。主イエスキリストの御名によってお祈りします。

アーメン